

## バリアフリー上映「飯舘村に帰る」トーク

**開催日時：**2020年11月29日（日） 11時45分～12時30分

**登壇：**島津信子（『飯舘村に帰る』制作者）

福原悠介（『飯舘村に帰る』制作者）

水谷仁美（せんだいメディアテーク 3が11にちをわすれないためにセンター担当）

**進行：**高橋梨佳（せんだいメディアテーク バリアフリー上映担当）

**高橋：**最初に今日のトークの趣旨をご説明します。

これまでせんだいメディアテークでは、誰もが映画を楽しめるように、目や耳の不自由な方への音声解説と日本語字幕、小さなお子さんがある方のための託児サービスを付けたバリアフリー上映会を開催してきました。映像に付く音声解説と日本語字幕は、当館で活動するボランティアの方々が制作しています。

これまでバリアフリー上映で上映した作品は、いわゆる商業映画、フィクションの作品が中心でした。今回は初めての試みとして、当館が運営する「3が11にちをわすれないためにセンター」、通称「わすれん！」の映像記録から上映をしました。また、バリアフリー上映の特徴やボランティア活動の魅力を知ってもらえるよう、普段はFMラジオを通して希望者だけにご利用いただいていた音声解説を会場全体に流し、日本語字幕付きの映像を上映しました。

今日は、『飯舘村に帰る』の音声解説と日本語字幕の制作活動を振り返りながら、その活動の魅力をさまざまな角度からお話ししたいと思います。まずはわすれん！について、担当の水谷さん、簡単に説明をお願いします。

**水谷：**「3が11にちをわすれないためにセンター」は、2011年からせんだいメディアテークで行ってきた市民協働の震災アーカイブのプロジェクトです。市民のみなさんと一緒に映像や写真、音声、テキストなどさまざまなメディアを使い、震災にまつわることがらを記録しようと活動しています。

この『飯舘村に帰る』という記録が生まれた経緯を簡単にお話しすると、2017年に飯舘村の避難指示が解除され、島津さんがそれまで関係のあった飯舘村の方々が帰村され始めたので、「そろそろ落ち着いた頃だろうからお話を聞きに伺って、それを福原さんに記録をしてもらおうと思う」というような話を2018年の秋頃に伺いました。それで、島津さんと福原さんにわすれん！活動に参加いただいて、何度かお話を聞きに行った映像も見せてもらいました。2019年3月に、わすれん！で毎年行っている「星空と路（みち）」という、わすれん！参加者の記録展示・上映会のイベントで初めてこの『飯舘村に帰る』を上映し、そのときも島津さん、福原さんに登壇いただいて制作の経緯などお話を伺うトークも開催しました。『飯舘村に帰る』という記録映像は、みなさまにご覧いただけるよう現在はメディアテークの2階のライブラリーでわすれん！DVDとして配架しています。

今回は、震災というその土地に閉ざされた、その土地からなかなか伝わっていきにくいものを、さらにさまざまな人たちと一緒に考えていくような取り組みとして、バリアフリー上映というかたちで上映させていただきましたが、改めて、どうしてこの作品を二人で撮られたのか、という経緯で飯舘村に行かれたのか、ここでもお話しいただければと思います。

**高橋：**では、島津さんと福原さんから、『飯舘村に帰る』という記録が生まれた背景について、お話しいただきたいと思います。

**島津：**私は「みやぎ民話の会」に所属しています。これまで県内のあちこちを訪ねては、昔話や民話を聞かせてくださる方を探して、その話や暮らしぶりを記録する活動をしてきました。また、求められれば、昔話を聞いてもらう活動も行ってきました。震災の後に自分に何ができるかを考えたときに、宮城県に一番近い国見町の仮設住宅に飯舘村の方々が暮らしていらっしゃるという聞き、そこを訪ねました。飯舘村に伝わっている昔話や、飯舘村がどんな場所かを聞けたらいいなと思い、自分が知っている昔話を聞いてもらいながら、何回か通っていました。みなさん暮らしていくのに精一杯で、「昔話なんて聞いたこともないし、語ったこともなかったよ」というお話でしたが、お一人お一人の暮らしぶりをぜひ聞いていきたいと思い始めたあたりで、全村帰還することになりました。その後、村に帰った方々を訪ねてお話を聞いていく中で、今日の映像に出演していた花井トヨさんから、昔話や不思議な体験を聞くことができました。そこで、トヨさんのお話を映像で記録したいと思い、福原さんに相談していました。そのころ、わすれん！のスタッフから「映画にしてみたらどうですか」というお話をいただき「やってみようかな」と思ったのがきっかけでした。

私が生まれ育ったのは丸森ですが、実は丸森と飯舘村は阿武隈山地を挟んで山のそちら側とこちら側という位置関係です。震災のときに飯舘村は全村避難というかたちになりましたが、丸森も放射能によって大変な思いをしました。丸森では、山の恵みである山菜やキノコが自慢のもとでしたが、今は山のものを食べるには制限があります。また、今の丸森では、去年の台風19号により、家が流されたり田畑に水がかぶって使えなくなったりして、仮設暮らしをしている方がたくさんいます。同じ仮設暮らしでも飯舘村と違うのは、丸森の人はまだそこに住み続けることができていることです。飯舘村の人たちは、家も田畑もそのままあったはずですが、それを全部置いて、6年も7年も遠く離れたところで仮設暮らしをしなければなりません。避難指示が解除され、村に帰る選択をした人もいれば、村にはもう帰らない、帰りたいけど帰れないという人もいて、村の方々にはいろんな迷いがずっとあったと思います。私がお話を聞いたのは、みんな村に帰るという選択をした人です。みなさん高齢で大体同じ世代だったため、「この歳だから放射能なんか受けてもそんなに影響はないだろう」「生まれ育ったところだからなんぼしても帰りたい」という思いの人たちがとても多かったのですが、実はそうではない人たちの中にも迷いがたくさんありました。飯舘村というのは高地にあり、年間の平均気温が10度前後という寒いところ。また、とても貧しい村でしたが、前の村長さんの奇抜な

アイデアやさまざまな工夫によって村づくりが行われてきました。例えば、秋の刈り入れの一番忙しいときに、中学生や若いお母さんたちを何人も外国に送り、将来の村の担い手としていろんな見聞を広めてもらうという大きな構想がありました。その人たちが村に戻らないという選択をせざるを得なかったことを考えると、今日見ていただいたお話の一つ一つがとても胸に響いてきます。できれば今後も、もっとたくさんの方々の思いを聞き続けていきたいと思っています。福原さんの映像の撮り方がきれいなので、とても良い映画に出来上がったなと思います。このような機会をいただきありがとうございます。

**福原：**本日は上映にお越しいただきありがとうございました。『飯舘村に帰る』を撮影・編集した福原と申します。撮影の経緯は島津さんからお話しいただいた通りです。僕と島津さんが一緒に記録を撮ることになったきっかけに、せんだいメディアテークとみやぎ民話の会が協働して行う「民話 声の図書室」というプロジェクトがあります。これは、島津さんたちが民話を聞いているようすを映像に記録してDVDにしたり、かつて民話の会が聞いてきた音の資料、カセットテープをCDにして配架したりする活動です。僕は、その撮影スタッフとして参加しているご縁で、今回一緒に記録を撮ることになりました。

僕は宮城・仙台の生まれで、この辺が実家なのですが、飯舘村とは縁もゆかりもありませんでした。震災後にいろいろなニュースで見えていましたが、飯舘村には行ったことがなく、どういふ場所かも知らなかったため、すごく興味があり、島津さんと一緒にお話を伺うことにしました。震災後の飯舘村という場所を考えると、どうしても被災地という側面でしかその土地を見ることできない自分がいました。ところが、実際に飯舘村を訪れ、島津さんと村の方々が親し気に話しているようすを見ると、島津さんが何年も通って親しくなってきた間柄ということもあり、「被災地」や「被災者」といったくくりで見るとは違うなと思いました。そこで実際に暮らしている人の生の声や親しいお話、必ずしも震災に関係があるわけではないお話を聞いていく中で、「この人たちがずっと暮らしてきた場所が飯舘村と呼ばれている土地なんだ」といふように、逆に人から土地を捉えていく視点を得られたような気がしました。映像には、いわゆる震災の被害の話だけではなく、嫁入りのときの話やトヨさんの80年ぐらい前の家出の話なども出てきます。これらは直接震災に関係のある話ではないのですが、人から土地を捉えていくことで、その土地に対する実感のようなものが生まれてきたため、そういうことを意識しながら編集しました。

**高橋：**続いて、今回の『飯舘村に帰る』の音声解説と日本語字幕の制作活動について、制作したボランティアの声を紹介しながら振り返ります。

最初に音声解説と日本語字幕の特徴と今回の制作の流れについて、簡単にご説明します。音声解説とは、目の不自由な方も映画を楽しめるよう、視覚的な情報を補うナレーションのことで、今回は、村の方々のお話とお話の間に、村の風景や村の人たちのお家のようなようすなどを解説していました。日本語字幕とは、耳の不自由な方も映画を楽しめるよう、話される言葉を文字

に起こすだけでなく、生活音や環境音など映像の中のさまざまな音を文字にしたものです。画面に話し手が映っていない場合は、誰の発言かわかるように話者の名前を表示するといった特徴があります。

次に、制作の流れについて簡単にご説明します。通常は、上映の約4か月前から制作を始めます。今回の上映は、当初は6月に開催する予定で、今年の2月には制作がスタートしていましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により一旦中止となりました。それに伴いボランティア活動もストップしていましたが、7月の終わり頃に活動を再開し、今日を迎えています。音声解説と日本語字幕の制作メンバーは、当館で開催する制作講座を受講した方々で、制作に必要な知識や技術を身につけた後、上映会に向けて活動しています。毎回作品ごとにメンバーを募り、集まったメンバーで制作します。活動は、シアターを出て道なりに進むとある「スタジオ」という場所で行います。初めに映像のどこを担当するか決めて、個人で作業した後、各々作業してきたものをスタジオに持ち寄り、みんなで何度も話し合いをしながら一つのものを作り上げていきます。また、完成に向けて、制作途中の音声解説や日本語字幕付きの映像を目や耳の不自由な方に見てもらう「モニター会」を行っています。

今回は、ボランティアのみなさんにとって、市民が制作したドキュメンタリー、そして震災記録に付ける音声解説と日本語字幕の制作に取り組むのは初めてでした。そこで、制作する中で考えたことや工夫したこと、難しかったこと、『飯舘村に帰る』という記録そのものの感想についてアンケートをとりました。その内容を紹介しつつ、実際にお話を聞いてみたいと思います。では、音声解説制作ボランティアの回答からご紹介します。音声解説の制作は、基本的な流れは商業映画と一緒だったそうです。村の方々が話されている映像の背景に、村の風景や、村の方の手作りのものといった大事に営まれてきた暮らしが描写されていましたが、話が続くために解説を入れる隙間は限られていました。そこで、村の方々のお話を一番大事に伝えようと、話し手が変わるわずかな時間に、何の情報をどういう言葉で伝えるか、丁寧に議論されてきました。そのあたりの工夫について、直接お話を伺いたいのですが、音声解説制作ボランティアの猪飼さん、お話しいただけますか？

**猪飼：**音声解説を制作しております、猪飼です。よろしくお願いいたします。

今回、島津さんと登場する方々の会話を伝えたいという思いがありました。本来なら映像に現れた人物の表情や、どういう場所に対談されていたかを解説に入れたかったのですが、とても間（ま）がありませんでした。例えば、最初に出てくる佐藤和生さんのところで、どうしても「お茶請け」「みかん」「こたつ」を入れたかったため、なんとか言葉を短めにして伝えようといろいろ検討しました。それから、7人の村の方々が登場されましたが、5つのグループに分かれているため、登場する最初の部分を同じように紹介しようと考えました。最初はその家の雰囲気や話を伝えながら登場人物の話を持っていきかけたのですが、解説を入れる時間が無かったため、「佐藤ツメノさんの家」とか「菅野元正さんの家」とか、「誰々さんの家」というかたちにしました。

**高橋：**その他に、「映像が始まる少し前に解説を入れるよう工夫した」とアンケートに書かれていました。映像を見ながら解説も聞いていた方は、映像と解説がずれていると感じるところもあったかと思います。これは、わずかな時間に来る限り解説を入れようと、場面が変わる前から解説を入れるという工夫によるものでした。

また、猪飼さんを中心に音声解説制作ボランティアのみなさんは「音パンフ」というものを作っています。音パンフは「音のパンフレット」を略したもので、目の不自由な方に音声で届ける作品の事前解説のことです。今回は飯館村の背景について調べた内容を解説していました。次に、日本語字幕の内容に移ります。日本語字幕の制作も基本的な流れは商業映画と同じでした。しかし、単に聞こえた音を文字に起こしていくのではなく、字幕を表示する時間も工夫していたそうです。例えば、佐藤ツメノさんのお話の中で、島津さんが「村に戻る以外の選択肢は考えなかった？」と聞き、ツメノさんが「ここが好きだから」と答える場面がありました。そこで、「ここが好きだから」という言葉が少しでも見ている人の印象に残るように、字幕の表示時間を長くとるという工夫をしていました。また、特にボランティアのみなさんが口にされていたのは、商業映画と違い、セリフではない話し言葉を文字に起こすのが難しかったということでした。福島の方のニュアンスやその人ならではの口調を大事にしつつ、耳の不自由な方に意味が伝わる字幕にするにはどうするか、とても悩まれたそうです。このことについて、佐藤和生さんのパートを担当した荒井さん、お話しいただけますか？

**荒井：**日本語字幕制作ボランティアの荒井と申します。私が担当したのは最初の佐藤和生さんと祐子さんご夫妻のパートでした。例えば和生さんが「ハ もう とにかく うーん フフ まあ こういくなつたつうが」とおっしゃっていたところがありますが、ここはお話しされている内容のほとんどがあまり意味のない言葉で、少し語調を整えるような言いよどみの言葉でした。字幕を作っていく中でも「あそこの字幕はいらないのではないか」という話も何回か検討事項に上がりましたが、最終的に私は「ここは入れたい」と思い、最後まで残しました。和生さんがお話しされているようすを見て、「こんなふうにお考えになってしゃべったんじゃないかな」と汲み取りながら入れました。これまで当たり前で暮らしてきて、自分の地元と分かっているようなところを「好きですか？」と正面から問われたときに、それを答える照れや、あるいは改めて考えていくと、そこに住む以外の選択の余地がなかったんだ、ということに和生さん自身が気づき直しているのではないかと。今読んでいる文字だけで読んだときはもしかしたら読みづらいかもしれないと思いながらも、そういう逡巡する言葉から、和生さんの心の動きみたいなものが読み取れないか、言葉のよどみみたいなものから伝わることもあるのではないかと思いながら字幕を作りました。

**高橋：**これまでの話を受けて、島津さんと福原さんにお聞きします。島津さんは、今日初めて『飯館村に帰る』をバリアフリー上映でご覧になりましたが、何か新しい気づきや感想などあ

れば、ぜひお話を伺いたいと思います。

**島津：**今日の上映をととても楽しみにしてきました。やはり方言や会話を文字に表すこと、その合間を縫って情景を音声で表すというのは、本当に大変なことだと思いました。映像では何も解説を入れず、見た方に感じてもらえるように編集してもらっていますが、映像に出てきた犬や馬にはそれなりに意味があったため、そこは解説を入れてもらったほうが良かったかなと思いました。また、方言を文字に表すというのは本当に大変なことだっただろうと、頭が下がる思いです。字幕を入れてもらうことで、より多くの方に映像を見てもらうことができ、また、前に自分で見たときよりもポイントを絞って見られました。ありがとうございました。

**高橋：**続いて福原さんに伺います。福原さんにはモニター会に参加していただくなど、音声解説と日本語字幕の制作に立ち会っていただきました。その中での気づきなどあれば、お話しただきたいと思います。

**福原：**まずは、普段、音声解説や日本語字幕で映画をご覧になっている方に、飯館村の方の話を届けることができたことをとてもうれしく思います。本当にボランティアのみなさんにも感謝しています。今までバリアフリー上映を見たことはあり、いわゆる音声解説と日本語字幕が付いた上映というイメージでした。今回、何度か制作過程を見せていただく中で、バリアフリー上映における「バリアフリー」とは、出来上がったものだけを指すのではなく、どうしたら伝わるか、そもそも何を伝えようとしているのかを考え、試行錯誤するプロセス全体を指すことに気づきました。ボランティアのみなさんは、何度も映像を見る中で「自分の見ているこの映像とは何か」を常に問い直していたはずですが、それはとても豊かな経験だったのではないのでしょうか。僕は今回、みなさんの制作過程の記録を撮っていたのですが、『飯館村に帰る』本編の前に流れた「予告編」という映像は、その記録から制作したものです。本編の内容はほとんど分からない映像なのですが、ボランティアのみなさんの制作過程を予告編映像にすることが、逆にバリアフリー上映の何か本質にあるのではないかと考えて作りました。ボランティアのみなさん、本当にありがとうございました。お疲れさまでした。

**高橋：**では続いて、進行をすすれん！の水谷さんをお願いして、より『飯館村に帰る』の内容に触れていきたいと思います。

**水谷：**今ボランティアのみなさんや高橋さんから、バリアフリー上映の制作の話をしていただきましたが、目の不自由な方や耳の不自由な方に情報を提供するという情報保障の範囲を超えて、伝わりにくいものを丁寧に伝えて感じました。先ほど福原さんの説明にもあったように、そもそもどのように伝えるのかというその試行錯誤のプロセスでボランティアのみなさんのすごく建設的な対話が行われていると思います。すすれん！の活動の中で、参加者の市民

の方々から記録を見せていただくのですが、どのようにその記録を見ていったら良いのか、ということとはよく考えさせられます。当然ながら自分たちの見え方や解釈しか出てこないわけですね。そのプロセスをみなさんと開いていくということが、すごく建設的な場だと思い、わすれん！の記録をどのように読み解き、どのように伝えていくのかということとをぜひボランティアのみなさんに考えていただきたいなと思い、わすれん！の記録のバリアフリー版を制作していただけないかと、かれこれ3、4年考えていて、今回それが実現しました。

今回は、震災の記録というものをバリアフリー化する中での葛藤があったと思います。先ほど福原さんの説明にもありましたが、今回の『飯舘村に帰る』という作品は、飯舘村が抱える社会問題を強く描くものでもなければ、強いメッセージを持っているものでもないわけですね。もしかすると「飯舘村」のことが知りたくて来られた方々は、「あれ？ちょっと思っていたのと違う」と感じているかもしれません。この作品は、震災前から飯舘村にあった日常の暮らしや風景というものを描くことによって、震災そして原発事故によって閉ざされた飯舘村の暮らしが見えてくる、よりその日常が見えてくるようなものだったと思います。そうした強い主張があるわけではない、すごくわかりやすいメッセージがあるわけではない震災の記録をバリアフリー化するうえで、どのような葛藤があったのかを伺えればと思っています。また同時に、この作品をバリアフリー化するのに約半年のあいだ、作品を見続けてきたみなさんに、この作品の感想も伺いたいと思います。

では最初に、音声解説の制作をされた佐藤紘子さんに伺います。私たちわすれん！や制作スタッフと、音声解説を作るうえでいろいろなやり取りがありました。例えば、映像の最初に、飯舘村の風景の中に「フレコンバッグ」という黒い袋の山や緑の列の風景が見えたと思いますが、その風景を音声解説にするうえでの難しさについてお話ししました。紘子さんのアンケートには、「もっとわかりやすく『ここにフレコンバッグがあるよ』とか『緑の山の列の中にフレコンバッグがあるよ』と強く言ってくれたら簡単なのに、そういう塩梅が難しい作品だった」と寄せていただきましたが、そのあたりのお話を伺えたらと思います。

**佐藤：**音声解説制作ボランティアの佐藤紘子です。今、フレコンバッグの緑の列について話が出ましたが、一般的な商業映画ならば「ここを見てほしい」というところがあると、そこにカメラを近づけてアップにし、隅のほうにフレコンバッグをチラッと見せるなどすると思うのです。そういう撮影の仕方をしてくれれば、音声解説の制作はものすごく楽なのです。そして見てもらう人にも、「あそこはそうだったんだ」と気づいてもらうことができます。今ご覧いただいたように、この映画は何にも言いませんし、単なる自然の遠景に山があり、手前に田んぼがあり、その中間に何やらあるなあと思う、そういう映像なのです。私たちはそういうところをどういうふうに解説を入れたらいいのかと、わすれん！のみなさんとも議論しました。わすれん！からは「いや、フレコンバッグなんて言っていないよ」とか「映っていないよ」とか散々言われましたが、やはり一回は言わなきゃダメだと思いました。音声解説というのは、踏み込んだことやあまりにも意図的なことは言っていないのです。また、感情表現を入れないように、

客観的に映像の通りに紹介し、そこから受け取っていただくということが基本です。この場面を見て「山が良いなあ」「手前の田んぼの刈り取りはすっかり終わったんだなあ」と素通りする方もいれば、「真ん中の緑のは何だ?」と気づく方もいます。なので、そこまで踏み込まなくてもいいというわすれん!からの意見もわかりましたが、メンバーで何回も話し合っ、最終的に「目の不自由な方々には、山も田んぼも何にも見えていないのだから」と、そこだけ少し踏み込んで解説を入れました。他のところでは、馬とか犬は、もうあるがままの説明にしました。そこに何かメッセージがあったのだと、今島津さんのお話を聞いて気づいたくらいです。

**水谷:** 今紘子さんがおっしゃった通り、みなさんが情景から思い思いのことを考えていただければ良いという作品なのですが、その隙間にどのような言葉があったら、そこから考えることができるかということをお話し合っていました。先ほど「フレコンバッグ」と言いましたが、登場する村の方々は「フレコンバッグ」という言葉は一言もお話しされていないんですね。福島風景の中では、「フレコンバッグ」という汚染土の入った黒い袋は、当たり前のようにあり、東北ではなじみのあるものかもしれませんが、一般的には資材の入った建設業などで使われる「フレキシブルコンテナバッグ」の略称だと思います。この言葉でどのくらい伝わるのか、情報の出し方一つ一つに注意がなされていて、奥が深いなど、制作過程を見せていただいて思いました。

最後に、『飯舘村に帰る』の作品の感想を寄せていただいた日本語字幕制作ボランティアの渡辺明代さんに伺います。アンケートでは、作品の感想について「最初は被災した方々のインタビューというふうに見たけど、何度か見るうちに、途中から一地方に暮らす人々の暮らしや胸の内が見えて見えるような記録でした」と書いていただいて、すごくありがたいなと思いました。このあたりを少し伺えますか。お願いします。

**渡辺:** 日本語字幕の制作を担当しました、渡辺と申します。まず、上映会を無事に開くことができ本当にうれしく思っています。関係者のみなさま、心から感謝申し上げます。それと、私たちボランティアの活動を今回こういうふうで紹介していただけたということがとても恐縮といえますか、うれしく感じております。まず御礼申し上げます。

『飯舘村に帰る』の感想ですが、水谷さんがおっしゃったように、最初にこのお話をいただいた時はいわゆる報道で見るような、何か問題提起をすとか、行政のアクションを期待するようなものを想起していました。ところがいざ見てみると、なんといってもインタビューを受けている方がとても明るいです。それにまず「予想していた感じと違うな」と思いました。お嫁にいらしたときのユーモラスなお話もあり、これはちょっと私が思っていたことと違うなど、被災したことでご苦労されたことを語るというのとはまた別なのだなど、何回か映像を見直すごとにすごく感じました。そして少し視点が変わりますが、みなさん前向きですし、起こってしまったことは仕方がないのでそれを受け入れて日々過ごしていくという、ツメノさんのところにそういうシーンがありましたが、それはやはりすごいなと思いました。今、私たちも同じよ

うなコロナ禍にあります。先が見えない、これからどのように活動を続けていけるのかわからない不安の中で、そういう方々の前向きで明るく、ある種の仕方ないという部分もあると思いますが、そうした態度がすごく力になりました。また少し別の視点で受け止めることができたというのが、今回の感想です。

**水谷：**震災から10年の年に、コロナという誰もが予想していなかった状況が起こりました。私たちはわすれん！の活動を10年続けてきて、震災のこと、そして記録を伝えていくということをやってきた中で、みんなで集まって一緒に映像を見るということ自体が難しいという状況があるのかと、正直本当にびっくりしています。そのような中、こうしてみなさんと一緒にシアターで映像を見ることができて、本当にうれしく思います。バリアフリー上映というさまざまなバリアや、震災が持つバリア、その土地からなかなか伝わりにくい小さなことごとについてみなさんと一緒に考える機会をこの場で持てたことをうれしく思っています。

**高橋：**最後に、島津さんと福原さんに一言ずついただいてもよろしいですか。

**島津：**私は最初に飯舘村に入ったとき、大事な田畑の上や、村のいたるところにフレコンバッグがあるのを見ました。1段あたり1mを越す袋が5段も積み重なっていて、それを緑色のシートで覆っているのですが、「これはなぜ緑なのだろう、もっと目立つ色にすればいいのに」とすごく憤りを感じました。映像に出演されていた村の方々は、「現実として受け入れざるを得ない、そうでないと生きていけない、前に進めない」という思いでいらっしゃいます。怒りは怒りとしてありますが、どうしようもできないため、昔のことを思いながら日々の暮らしを大切に過ごしていらっしゃいます。今回はこういうかたちで一つの作品になりましたが、映画にするときに、もう少し真剣に考えれば良かったと思います。それを反省として、次につなげていきたいです。今日は本当にありがとうございました。

**福原：**先ほど音声解説や日本語字幕の制作過程もバリアフリーなのではないかという話をしましたが、今日、一度中止になった上映会を何とか開催することができ、音声解説や日本語字幕で映画をご覧になっている方にも見ていただくことができ、さらに気づいたことがあります。それは、制作する過程もバリアフリーであり、できたものを見ていただいていることもバリアフリーだということです。一方的に提供されるサービスではなく、それが見られることまでプロセスに含まれていることに気づきました。本当にありがとうございました。

**高橋：**それではこれでトークを終わります。今日はこのような状況の中、ご来場いただきありがとうございました。